

国際シンポジウム「放射線看護を世界へ発信する」

International symposium on the dissemination of radiological nursing to the world: The chair's report

小西 恵美子¹ 高村 昇²

Emiko KONISHI¹ Noboru TAKAMURA²

1 鹿児島大学

2 長崎大学

1 Kagoshima University

2 Nagasaki University

放射線看護は、世界では診療の場が主な舞台である。しかし日本は、過去には広島・長崎の原爆、そして最近核燃料工場の被ばく事故や今回の原子力発電所事故を経験し、放射線看護の枠組みを、地域や産業現場の人々、また被ばく患者のケアも実践できるさらに高度なものへと拡大させつつある。本シンポジウムは、そこに日本の放射線看護を世界に発信する意義を認めて企画されたものと思う。4人の演者は英語でスピーチした。

最初は富澤登志子氏が、「放射線被ばくと看護診断」について講演した。被ばくに関わる看護診断ラベルがないことに着目し、その開発を通して放射線看護を見える化し、世界に発信していく構想で、すでに研究に着手しているとのことであり、成果を期待したい。

2番目は、山田智恵里氏が、「モンゴル1地区での被ばく・緊急対策確立の過程で地域と個人の健康とレジリエンスを強化する」活動を講演した。2000年代に未開発ウラン鉱床の試験採掘が行われ、放置された採掘土壌からの被ばくで家畜が異常死したとの遊牧民の訴えを発端とする支援活動で、被ばくレベルは極めて低く、住民への放射線知識の普及と健康増進などが眼目とのことであった。人々に向き合う看護の重要性を痛感させられた。

3番目は、折田真紀子氏の「長崎大学・川内村復興推進拠点における放射線看護の国際的な発信に向けた活動」であった。長崎大学は、川内村の住民帰還と新しい村づくりを支援しつつ、同村を拠点に被ばく医療学に関する国内外の看護職を含む専門家の育成や研修を行っていること、および、折田氏自身が、IAEAを含む国際機関で講演を行ってきたことが報告された。折田氏には、看護職としてのアイデンティティーを見失うことなく、学際的・国際的な活動をますます進めてほしい。

4番目は、長崎大学院生・佐藤奈菜氏（福島県出身）の「看護職として放射線を学ぶ—福島、長崎、ロシアでの経験から」であった。チェルノブイリ事故を経験したロシアに行き、セミナーやワークショップ、あるいは研究所見学などとおし、他国の学生との連帯を感じることができたとのことであった。佐藤氏の背景には、高校時代に福島で経験した東日本大震災と原発事故、その後進んだ県外の看護大学での風評・差別の体験がある。その辛い体験をポジティブに転換して、彼女は今、長崎で放射線を学び、それに向き合う道を進んで

doi: 10.24680/msj.7.1_47

いる。今後の成長が楽しみである。

最後に、フロアから前田樹海氏が、「看護診断ラベルがないということはその看護問題があっても看護師同士で共有できる用語体系がないということであると同時に、そもそもそういう看護問題を問題と捉えていないという根源的な問題が浮き彫りになったのではないか、今後は学会もバックアップしながら、放射線看護領域の看護問題を表現できる共通の用語体系を整備する必要がある」と、示唆に富む発言をして、シンポジウムは締めくくられた。